

辞書の効果的な指導

— 自立した学習者を目指して —

鈴木 悟

(東京都立両国高等学校附属中学校)



1. なぜ辞書を使えるようにさせるのか

教科書の巻末の付録には単語の意味・品詞・発音記号などが全て載っている。生徒の立場からすると「単語の意味」を知るだけならこの付録だけで十分ということになる。重い辞書をわざわざ学校に持ってくる必要性を感じないし、また家に持ち帰らなくても課題はできる。一方、教師の立場からすると、課題で単語の意味を調べさせても生徒が辞書を引きたがらないし、授業で辞書を引かせても時間がかかる。結果的に巻末の付録の活用を勧める教師も少なくない。このような状況で辞書を活用していくためには次の2点が入門期の指導の鍵となる。

- ・辞書を引くことに慣れさせる
- ・辞書の有用性に気づかせる

これらの指導を通じて自立した学習者を育てていくことが授業で辞書を活用する最大の目的だ。

2. 辞書を引くことに慣れさせる

辞書を使いこなせるようになるには時間がかかる。辞書指導はアルファベットの小文字の指導が始まる頃から始める。最初はクラス全体で辞書を素早く引けるようになることを目標に、早引き競争をしたり、意外な意味を見つけたり、自分の知っている単語に付箋をつけたりして、楽しみながら辞書に慣れさせ、辞書の仕組みも理解させていく。ここでの指導が不十分だと、後の授業で辞書を引く際に余分に時間がかかったり、教科書の巻末の付録だけを使うようになり、辞書を使う学習者にはならない。

辞書を引いたらそのページに付箋を貼るのもよい。付箋には、調べた順番がわかるように、番号・

単語・そのとき調べた意味を書いておく。次に使う付箋に次の番号を記入しておけば手間も省ける。生徒は、付箋の数が増えていくことで辞書への愛着が湧き、辞書を引くことへの意欲も高まる。

3. 辞書の有用性に気づかせる

中学1年生の入門期に、集中して辞書指導に取り組んだが、その後、生徒が主体的に辞書を使うようにならないという経験はないだろうか。

生徒によって辞書で調べたい語句は異なるため、教師が指定した単語の意味だけを問うような辞書の使い方に終始してしまうと、生徒は辞書の価値には気づかず、能動的な学びにはつながらない。

辞書の使い方に慣れてきたら、生徒が調べたい語句を辞書で引くような活動を設定し「辞書があれば先生に質問しなくても一人で課題解決できそうだな」と、その有用性に気づかせるための段階的かつ継続的な指導が、生徒の自学自習を促していく。

4. 「英和辞書」の活用—『エースクラウン英和辞典』（三省堂）を例に

発信力を身につけることを目的とした『エースクラウン英和辞典』（以下『AC』）には、語彙の「難易度表示（CEFRのランク・田 圃のロゴ）」・発信力のコアとなる最重要語彙を取り上げた「フォーカスページ（語のイメージや使えるコーパスフレーズなどを提示）」・充実の「和英小辞典」など、生徒にとって有益な情報がいろいろと載っている。

(1) 単語の目利き

『AC』では、4技能の運用能力を伸ばしていく過程で生徒が出会った単語の難易度を知ることができ、「発信語彙（使いこなせるように例文や用例ま

でしっかりと覚えるべき語彙)」には A1・A2, 「受容語彙(意味だけ知っていればよい語彙)」, または「忘れてもよい語彙(出会った時に辞書を引けばよい語彙)」には B1・B2 が表示されている。これらを活用して, 生徒自身が「単語の目利き」をできるようにすれば, 学習効率が上がり飛躍的に語彙力を上げることができる。

(2) 発信場面での「和英辞書」の活用

中学2年生頃になると, 辞書の例文もある程度理解できるようになる。単に例文を読ませるだけでなく, どのように活用するか指導するチャンスだ。

1年生では, 教科書の既習の語句や定形表現を主に使ったスピーチやスキット活動を通じて, 「発信語彙」を増やしていく。2年生以降, 自分の体験や意見・考えなどを述べる場面が増えてくるため, 生徒は既習の「発信語彙」だけでなく, 「和英辞書」を使って自分の言いたいことを表現しようとする。

例えば, 沖縄旅行についてのスピーチ原稿を書く際, went to / visit の繰り返しを避けるために, 「和英辞書」を使って「旅行」⇒“trip”を探し出し, “I went to the trip in Okinawa.”や“I can trip to Okinawa.”のような英文を書いていたとする。このような英文が見られたら, 今度は“trip”を「英和辞書」で調べさせ, その例文“I made a trip to Okinawa.”などの用例を確認させることで, 生徒は始めに書いた英文の間違いに気づき, 修正するようになる。

5. 効率のよい「英英辞書」の使い方

(1) レベルに合った「英英辞書」の選択

卒業時のCAN-DOを「即興で話す力」(『TEN 特別増刊号 vol.1』拙稿参照)とするならば, 英語を英語のまま理解して表現できる力を高めていく指導が肝心だ。その過程で「英英辞書」の活用も効果的だ。「英英辞書」は辞書によって難易度が異なる。英語学習者用ならば, 定義を説明する文に使われる単語の数が制限されているので容易に読める。例えば“apple”の定義は次のように書かれている。

apple: a hard round fruit with green or red skin.

(2) 「知っている単語」を調べる

「英英辞書」の導入は, 「知っている単語」の意味を調べさせるのが指導の鍵だ。ペアになりクイズ形式

で単語の定義(先のappleの例)を出し合うことで, 楽しみながらさまざまな表現に触れられる。定義の説明には, 後置修飾(関係代名詞・不定詞等)が多用されており, 生徒は後置修飾を意識することなくその使い方を自然に身につけられる。また, B1以上の難易度の高い単語を知らなかった場合でも, 既習の語句で容易に言い表せることにも気づいていく。

(3) 「受容語彙」を「発信語彙」へ

スピーチ等の発表活動で未知語を使うことは, 新しい語彙を学ぶ良い機会である。しかし, 例文等で用法を確認せずに誤ったまま使ったり, 未知語の数が多すぎて, 聞き手の理解が不十分になり, 言いたいことが伝わっていないということはないだろうか。

depressed: very unhappy for a long period.
tragedy: a very sad thing that happens.

(NEW CROWN 3 の B1 レベルの語彙の例)

例えば, 発表時に聞き手の理解も深まるように, 上記のような難易度の高い未習の単語を生徒が使おうとしているときは, 「英英辞書」で調べて, 定義に書かれている既習の「発信語彙」に置き換えるように指導する。このような単語の使いこなしが自分でできると, ディベートやチャット等の即興的な発話が求められる場面でも, 必要とする的確な表現が思い浮かばなくても, 知っている表現をうまく活用しながら言いたいことを伝えられるようになる。

6. まとめ

辞書はまず, 慣れさせてから使い方を教えないとその有用性には気づきにくい。学校で教師が生徒に教えられることや時間は限られている。また高校では中学校ほどていねいに教えてくれない。それゆえに生徒が辞書を使いこなして能動的に学び, 課題解決能力や探究心を身につけることが, 英語の4技能を身につける上では欠かせない。英語力向上の近道は, 「辞書を使いこなせる自立した学習者」になることであり, これは同時にアクティブ・ラーニングの出発点と言っても過言ではない。

【参考文献】
投野由紀夫(2015).『発信力をつける新しい英語語彙指導』三省堂。